

オカピの麻酔下での削蹄事例を歩様の変化について

○森田 菜摘
(横浜市立よこはま動物園)

当園では、2017 年より定期的にオカピの削蹄を麻酔下で行っている。対象は 2001 年にアメリカで生まれた雄とその子にあたる 2014 年当園生まれの雌である。雄は 12 才頃から、四肢の過長蹄が目立つようになってきた。当初は、幅の狭いシュートに入れ、起立姿勢のままですり等を使い蹄の管理を試みたが、過長が進行したため全身麻酔下にて装蹄師による削蹄を行うこととした。雌は雄とは違う変形蹄を持っており、蹄中央部から大きな切れるが入り全体が崩れるように変形したこともあり、エクイロックス（蹄充填剤）を使用した治療の例もある。当時国内ではオカピを麻酔下で治療した例はなく、初めての試みであった。

その後、雌雄それぞれの個体にほぼ毎年削蹄を行い蹄の状態を管理している。当初、転倒時のクッション材として敷いていたおが粉も作業中に個体の目や口に入るという理由からポリエチレン製のジョイントマットに変更する等、回を重ねるごとに改良を続けている。麻酔時も気管挿管ができるようになったことで、より安定して実施できるようになった。

削蹄前後は装蹄師、飼育担当、獣医師で歩様を確認している。雄に関しては、過長蹄により削蹄前は後傾姿勢になりがちだが、毎回削蹄から 1 か月ほどで新しい姿勢に慣れて、日中の座位時間が短縮されている。日常の飼育管理では、補講により自然と蹄が削られるよう最大限の運動スペースを与えているが、1 年で再び過長状態になるため現在では定期的な削蹄を続けている。